ドラム缶工業会会報

ひびき

60

CONTENTS

1 AOSD 2010 第7回AOSD国際会議開催さる
4 第7回AOSD国際会議 AOSD・中島廣久会長に聞く〈インタビュー〉
6 AOSDオプショナルツアー プラントツアーin九州
7 鋼製ドラムは〝リサイクルの優等生〟
8 新社長登場・ダイカン株式会社／河島秀行氏
9 ミニ時節講演会「日本経済の現状と展望」深尾光洋氏
10 化学産業の出荷額構成比の推移と概況
10 200Lドラム缶市場動向推移
11 平成21年度出荷実績
12 平成22年度上期出荷実績

AOSD2010 第7回

AOSD国際会議開催さる

平成22年9月8日～9日 福岡

AOSD（アジア・オセアニア鋼製ドラム缶製造業者協会）の第７回国際会議が９月８日から９日にかけて福岡市のヒルトン福岡シーホークで開催されました。

AOSDは国際会議をほぼ3年に一度開催し、今回はAOSD会員のほかに、新缶メーカー団体でICDM（国際ドラム缶製造業者連合会）に加盟するSSCI（米国ドラム缶工業会）、SEFA（欧州ドラム缶工業会）、更生缶メーカー団体のJDRA（日本ドラム缶更生工業会）も招待され、250人を超える方々が一堂に会して市場動向、技術動向、競合品の動向等を議論し、情報を交換しました。

前回の第6回国際会議の後、リーマンブラザーズの破綻によって引き起こされた世界規模の金融危機がありましたが、それからほぼ2年経ち、リーマンショック後の経験を相互に交換し、将来への更なるチャレンジに向かってアイデアを共有できる時期に来たとの認識で、この時期の開催となりました。

中島廣久AOSD会長
兼日本ドラム缶工業会理事長

以前からの、市場動向や技術動向を中心とした発表の他に、今回の会議では鋼製ドラム以外の業界からも講師をお呼びして次の4つの特別講演をしていただき、好評を博しました。

①SRIコンサルティング社　米山昌宏 日本担当副社長
「アジアの石油化学ーその過去と未来」

②化学工業日報社　織田島修 社長
「ージャーナリストが見たアジアの化学工業」

③日本鉄鋼連盟　安見一孝 常務理事
「アジアにおける鉄の需給」

④日本海事検定協会　三宅庸雅 監事
「容器内危険物の海上輸送規制」

発表を聞く会議参加者。 第一列手前は中島AOSD会長。 その右は吉田福岡市長。

発表を聞く会議参加者。

鋼製ドラムの信頼性、コスト競争力に関して、板厚の薄手化も話題になり、活発な議論がなされました。アジア・オセアニアの各国でドラム缶工業会が組織され、統計整備、規格化、標準化、安全環境、流通などの面でレベルアップが図られて、鋼製ドラムの競争力が一層強化されることが期待されます。

一連の発表、議論の後、決議された国際会議の決議事項を以下に紹介します。（下表）

鋼製ドラム、金属ペールの発展を目指し、国際会議に参加、協力するといった事項の他に、通常活動の強化と組織の強化を謳っているのが特徴です。

AOSD2010 （2010年9月9日）

第7回AOSD国際会議福岡 決議事項

会議テーマ 今後の鋼製ドラムの更なる挑戦

相互繁栄を目指すとの基本思想に立脚し、第7回AOSD国際会議福岡は次の通り決議する。

1. 本会議の出席者は、鋼製ドラム及びペール業界の発展に努める。
2. 本会議の出席者は、2013年頃開催を予定している第8回AOSD会議に積極的に協力する。
3. 本会議の出席者は、国際会議以外の下記のような通常活動においても、これまで以上にAOSDの活動に積極的に協力し、また組織の強化に向けて努力する。

（1）良質で丈夫、かつ経済的な鋼製ドラム缶を生産するとともに、加えて輸送や取扱いの分野においても共同して標準化を図ったり、啓蒙活動を行うことにより、鋼製ドラムの安全性・利便性をより高いレベルで実現する。
（2）UN/ISOのような国際勧告／規格への強い関心と、共同での取組み
（3）各国における鋼製ドラム及び金属ペールの年間統計整備
（4）会員登録率の向上
（5）各国における全国組織の結成と強化

フェアウエルパーティでのアトラクション獅子舞。

フェアウエルパーティでのアトラクション獅子舞。

当国際会議の期間に世界中の多くのドラム缶関係者が集合した関係で、AOSD 役員会議、ICDM 役員会議などが国際会議と前後して行われました。主な決定事項は以下の通りです。

AOSD 役員会議（2010 年 9 月 7 日）

①当国際会議後の次期 AOSD 会長は JSDA 理事長が3年任期で引き続き務める。

②同じく任期3年の副会長は韓国のリュウ氏、インドのダヤル氏、中国のチョウ氏、マレーシアのタン氏が務める。

③次回第8回 AOSD 国際会議は 2013 年頃に行う。

④ AOSD 会則の修正（会費制の導入、総会決定事項の役員会議決定事項への修正など）。

〈いずれも AOSD 総会にて承認されました。〉

ICDM 役員会議（2010 年 9 月 8 日）

① 2011 年 1 月 1 日付で議長団体が SSCI から SEFA に移行する。任期は3年間。

② 2011 年のドイツでの INTERPACK 開催中にドイツの団体が金属容器の催しを行う。その中でスティールドラムを ICDM として出展することを検討する。

③欧米の新缶製造会社が更生缶部門を併置する方向に進みつつあるとの情報も複数出た。

AOSDディナー。右列、手前から二人目は中島AOSD会長。左列、手前から二人目はタンAOSD副会長。その奥、一人おいてリュウAOSD副会長。その奥はダヤルAOSD副会長。

ICDM役員会議。中央、左から二人目は中島AOSD会長（当日はICDM会長代理）。その右、一人おいてリュウAOSD副会長（ICDM役員会議メンバー）。

高い安全性を再認識 地球環境への貢献も強調

第７回アジア・オセアニア鋼製ドラム缶工業会国際会議の開催にあたり、同会議の主催者である中島廣久 AOSD 会長に、今回の会議の意義・位置付け、アジア・オセアニア地域のドラム缶市場の動向などを聞いた。

中島廣久：AOSD会長・日本ドラム缶工業会〈JSDA〉理事長〈JFEコンテイナー社長〉
インタビュアー：織田島修〈化学工業日報社社長〉

織田島：今回の会議は、世界同時不況、いわゆるリーマンショックの後の会議ということで、ドラム缶メーカー各社にとっても、この不況をどう乗り切ったのか、今後の市場動向をどのように見ているのかに関心があるのではないでしょうか。日本のドラム缶の需要は、だいぶ回復しているようですが、国内状況はいかがですか。

中島：ドラム缶の日本での需要はリーマンショック前は年間1,600万缶近くありましたが、これが瞬間的に、月別でみると半分くらいになった。一昨年の下期と前年上期が悪い状態でした。現在は、リーマンショック前の水準の８割強まで回復しており、その要因は化学業界の回復によるものです。ドラム缶需要の８割近くが化学業界向けで、この需要回復が大きく影響しています。後は塗料が回復すればと、期待しているところです。ただ、われわれは８割の需要回復とみて生産計画などを進めてきたのですが、予測以上に需要が回復しているので現状ではドラム缶がひっ迫している。さらに生産コストの鉄への依存率が65％になるドラム缶にとって、鋼板の価格上昇が直接影響しており、厳しい状況でもあります。この点についてはユーザー各社もご理解を示していただき、値上げにもほぼ応えていただいている状況です。

織田島：85％くらいまで回復したということですが、リーマンショック時には皆さん、相当ご苦労された。どのように努力されて立ち直ってきたのでしょうか。

中島：各社でそれぞれ努力されたと思いますが、まずムダを省くということ。例えば残業をなくすなどして人件費を抑え、生産効率をさらに上げるよう努力するなどしてきています。

織田島：今回の会議に際して、中島会長は「リーマンショック後の経験を相互に交換し、将来に向けたアイディアを共有できる時期」に来たのではと、意見交換を呼びかけています。この時期に日本で開催する今回の国際会議の意義といいますか、会議の焦点は。

中島：リーマンショックに対して、アジア・オセアニアのドラム缶各社がどういう形で対応してきたのかは、大いに参考になるところです。中国、韓国、インドなどのドラム缶メーカーが、どのような経験を踏まえて今後の市場を見ているのかは、会議でも大きな焦点になると思います。また日本のドラム缶工業にとっても、アジア市場がどのように動くのかは関心のあるところです。ドラム缶の需要は、中国で大きく伸びているし、インドや韓国でも増えています。各国のドラム缶メーカーが他の市場に展開するのにも、今回の会議での報告は参考になるでしょう。

織田島：ドラム缶の競争力という点では、いかがですか。

中島：ドラム缶は作ろうと思えばどこででもできるのですが、しっかりしたものを作って、検査して、そしてユーザーが安心して使えるドラム缶となると、そう簡単に誰でもができるというわけではありません。ＡＯＳＤのメンバー会社が果たす役割はその意味でも大きいといえます。

ドラム缶は安全性の高い容器です。危険物の運搬容器として国連の認可も受けており、さまざまな容器のなかで一番安全だと認知されている。最近ではプラスチック容器や、欧米ではＩＢＣがドラム缶の競合容器として登場していますが、日本ではＩＢＣはそれほど伸びていないし、中国でも伸びるといわれていたが、それほどでもないようです。

活発な情報交換でニーズに的確対応

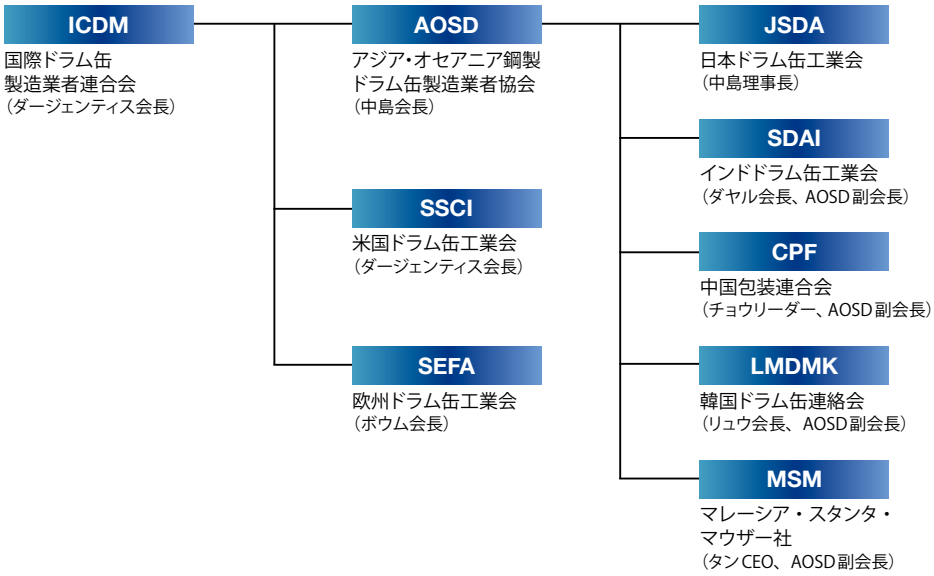
日本では、ユーザーのドラム缶に対しての認識は高いと思います。とくに化学会社のドラム缶に対する認識はかなり高く、安全性はもとより環境対応型の容器としての理解は深いと思います。

織田島：今回の国際会議を通じて、ドラム缶のユーザーや会議参加者へのアピールということではいかがですか。

中島：ドラム缶の安全性をさらに認識すること。そして、容器の安全性とともに、再利用・再生利用・資源としてのリサイクルという３Ｒを通じて地球環境に優しい容器であることを改めて認識して、そのことをもう一度アピールしていきたい。ドラム缶はあまりにも一般化しすぎた容器ですので、改めて、この機会に、安全性と環境に優しい容器であることを再認識する場にしていきたい。またドラム缶では胴の板厚1.0ミリという、ドラム缶の強度を確保しながら軽量化、薄板化が進んでいます。これは省資源にもつながる取り組みですので、この点も強調したい。そして、市場のトレンドとか、需要の動向、そして他の容器との関係などを見ながら、われわれドラム缶メーカーは、どういうことに注意していかなければならないのか、そういうことに意見交換を進めていきたい。20年前にこの国際会議がスタートした時の大きな目的は、アジア・オセアニア地区のドラム缶メーカーの情報交換の場を作ろうということでした。この目的は、これまで以上に重要になってきていると思います。

（『化学工業日報』2010年9月1日付掲載記事より）

ドラム缶製造業者の国際組織図



ICDM:International Confederation of Drum Manufacturers

AOSD:Association of Asia Oceanic Steel Drum Manufacturers

SSCI:Steel Shipping Container Institute

SEFA:Syndicate Europeen de L'Industrie des Futs en Acier

JSDA:Japan Steel Drum Association

SDAI:Steel Drum Association of India

CPF:China Packaging Federation (Steel Drum Committee)

LMDMK:Liaison Meeting of Drum Makers in Korea

MSM:Malaysia Stanta Mauser

AOSDオプショナルツアー
プラントツアーin九州

国際会議の翌日（9月10日）にオプショナルツアーとしてプラントツアーを行いました。

訪問先は①トヨタ自動車九州株式会社宮田工場、②株式会社山本工作所、③北九州エコタウンの３か所です。会議参加者のほぼ半分に当たる120人程が当ツアーに参加し、熱心に説明を聞いていました。

①トヨタ自動車九州株式会社　宮田工場

福岡市近郊にあり、高級車レクサスを中心に年産約43万台を生産しています。

トヨタ自動車九州㈱宮田工場の展示場。

トヨタ自動車九州㈱宮田工場の展示場。展示車の前のレスター･トリラ氏（元SSCI会長）。

②株式会社山本工作所

日本の大手ドラム缶製造会社で、北九州市の新日本製鐵株式会社八幡製鉄所近くにドラム缶製造工場を持っています。当工場では200Lドラム缶製造だけで年産約100万本を生産し、他にも中小型のドラム缶を生産しています。

株式会社山本工作所での山本社長の歓迎の辞と説明。

株式会社山本工作所での説明を聞く参加者。中央、青い服はタンAOSD副会長。

③北九州エコタウン

製鉄・化学を中心とした製造業で栄えてきた北九州市があらゆる廃棄物を他産業の原料として活用し最終的にはゼロ・エミッションを目指すというエコタウン事業に日本でもトップランナーとして取り組んできました。当エコタウンは研究施設から実証工場まで規模・内容ともに日本で最も充実した環境産業の集積地といわれています。

エコタウンセンター

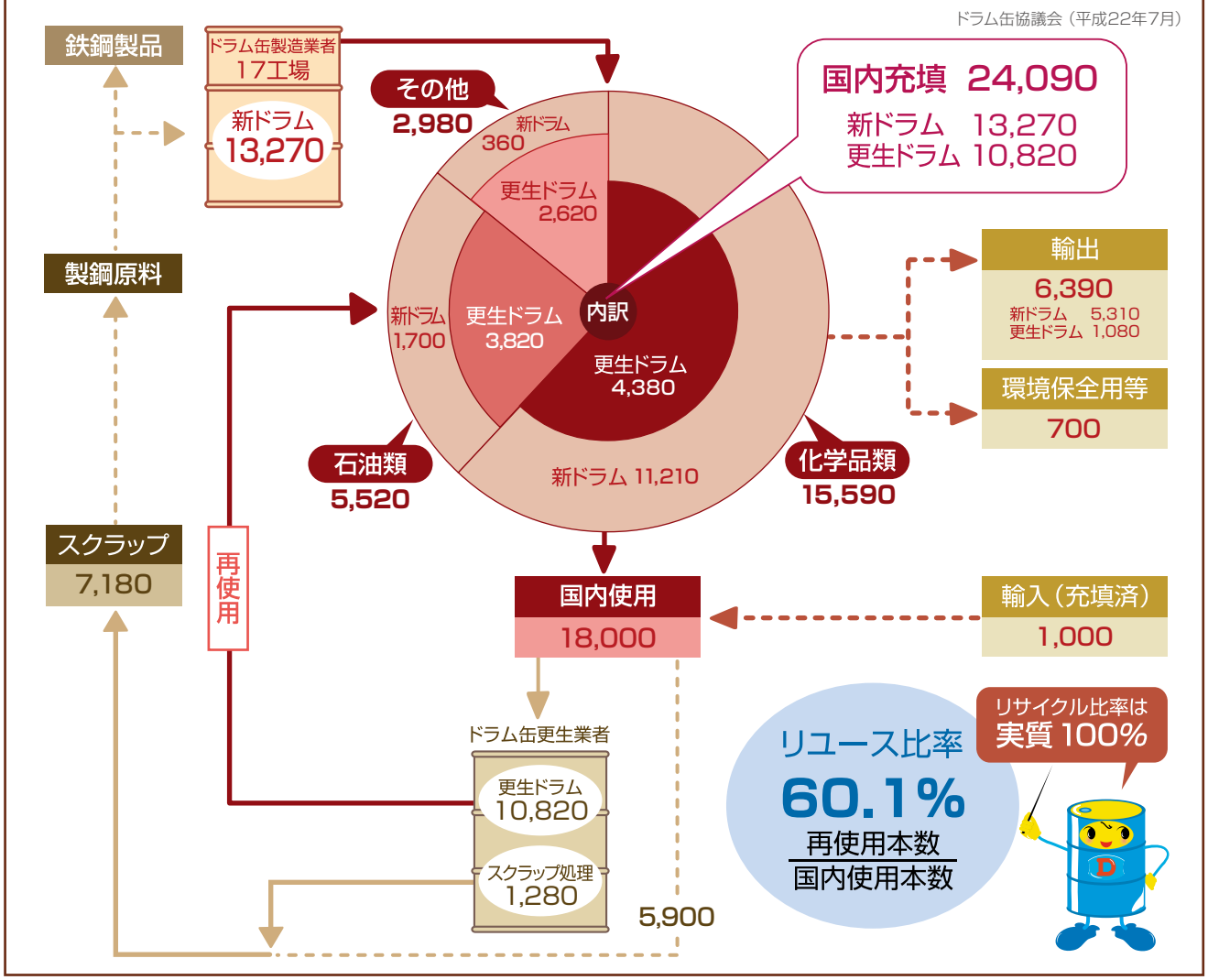
鋼製ドラムは“リサイクルの優等生”

資源としてのリサイクル比率は実質100%

鋼製ドラムは使用後、一部は更生缶メーカーに回収され、一部はユーザーから直接スクラップ処理業者に回収されています。ドラム缶はこのようにリユース（再使用）およびリサイクル（再利用）が確立しており、循環型リサイクルの優等生といえます。下の図は平成21年度版200L鋼製ドラムリユース&リサイクルフローチャートです。ドラム缶のリユース比率は60.1%になりますが、環境保全用ドラム缶を除くと、資源としてのリサイクル比率は実質100%になります。

200L鋼製ドラム リユース＆リサイクルフローチャート（平成21年度ベース 単位:千本）

ドラム缶協議会（平成22年7月）



		当初（平成9年）	16年度ベース	17年度ベース	18年度ベース	19年度ベース	20年度ベース	21年度ベース
工場数	新ドラム	18工場	17工場 (+1)	17工場 (変わらず)	17工場 (変わらず)	17工場 (変わらず)	17工場 (変わらず)	17工場 (変わらず)
製造本数	新ドラム	12,000千本	15,190千本 (+11.8%)	14,950千本 (▲1.6%)	15,390千本 (+2.9%)	15,800千本 (+2.6%)	12,950千本 (▲18.0%)	13,270千本 (+2.5%)
	更生ドラム	16,000千本	13,490千本 (+4.9%)	13,660千本 (+1.3%)	13,680千本 (+0.1%)	13,370千本 (▲2.3%)	11,350千本 (▲15.1%)	10,820千本 (▲4.7%)
国内充填		28,000千本	28,680千本 (+8.4%)	28,610千本 (▲0.2%)	29,070千本 (+1.6%)	29,170千本 (+0.3%)	24,300千本 (▲16.7%)	24,090千本 (▲0.9%)
国内使用		26,000千本	23,130千本 (+4.8%)	23,050千本 (▲0.3%)	23,380千本 (+1.4%)	23,390千本 (+0.0%)	19,580千本 (▲16.3%)	18,000千本 (▲8.1%)
リユース比率		61.5%	58.3% (変わらず)	59.2% (+0.9%)	58.5% (▲0.7%)	57.2% (▲1.3%)	58.0% (+0.8%)	60.1% (+2.1%)

新社長登場

ダイカン株式会社

今年6月に社長に就任したダイカンの河島秀行社長は、「有言実行」をモットーに、社の内外にわたるコミュニケーションを重視した経営姿勢を鮮明にしている。

神戸製鋼所時代からこれまでに培ってきた営業経験をベースに、ユーザーニーズを的確に把握して、顧客とともに歩む技術のダイカンの評価をさらに高めようと、意欲的な取り組みを続けている。

ユーザーのニーズを先取りした提案型の営業を進める。

ダイカン株式会社　代表取締役社長

河島　秀行

総合容器メーカーの強み生かす

ダイカンは創業90年を超える産業容器の総合メーカー。鋼製の中小型缶・200リットルドラム缶をはじめ、ステンレス缶（20～200リットル）などの特殊容器、そして紙製のファイバードラム（20～200リットル）と多彩な製品を市場に供給している。社長就任で、最初に感じたことは「ドラム缶をはじめとしてそれぞれの容器の品質の高さと、その高品質を維持することは大変なことであるということ」という。ユーザーサイドにおける内容物に対する品質管理の徹底が進むなかで、容器の品質への要求も一段ときめ細かい。「それだけに、高い品質の容器を提供する我々の使命は重く、最優先で取り組むこととして品質管理の徹底をあげているのも、内容物に対する責任の重さを感じているから」ともいう。

ユーザーへの提案積極的に

社内におけるコミュニケーションもこれまで以上にきめ細やかに進めている。次のステップでは客先への訪問を積極的に行う考えだ。「ユーザーのニーズは変わっており、多様だ。それに可能な限り対応していく。幸い、ダイカンは金属から紙製まで、また容量としても15から200リットルまでと、幅広い製品を持っており、これをベースにして、ユーザーが求めるものを提供するとともに、ユーザーのニーズを先取りした、提案型の営業にも力を入れていきたい。チタンなど新たな素材を生かした容器の開発も可能で、これからが楽しみ」とフットワークの良さを生かしたトップセールスにも果敢に挑戦する。総合容器メーカーとしての強みを生かすことを基本に次代のニーズにも積極的に対応していく姿勢を明確にする。「中小型ラインのリフレッシュなども検討したい」と、生産設備面での強化にも乗り出していく。

有言実行とコミュニケーションの深化

河島社長は、『有言実行』をモットーに、社内にあってはきめ細かなコミュニケーションを進めている。「言ったことは実行しようと。そして数字を出して、言葉にしていく。これは製造でも販売でも同じこと」と歯切れもいい。メリハリの利いた口調ときめ細かいコミュニケーションは社内の雰囲気をこれまで以上に明るくしている。

趣味はウオーキングとゴルフ。ゴルフ歴35年余で、HD7の腕前とか。「今は、そんな実力はありません。ダイカンに来てから10月に会社の主催するコンペをするまでドラム缶の関係者とは一度もプレーしていません。メッキがはげるだけですから。中部銀次郎さんの本を何度も読み返しては、そうだな、そうだなと。今でも同じミスを繰り返しています」というが、体を動かすことが何よりもお好きのようだ。「ダイカンの野球部が、地元此花区の大会で初めて2回戦を突破しまして、これは部結成以来の快挙」と、これを機に、事業においても次の快挙が期待されている。

（11月2日取材）

ミニ時節講演会　平成22年3月26日

日本経済の現状と展望

―成長力強化のための金融・マクロ政策―

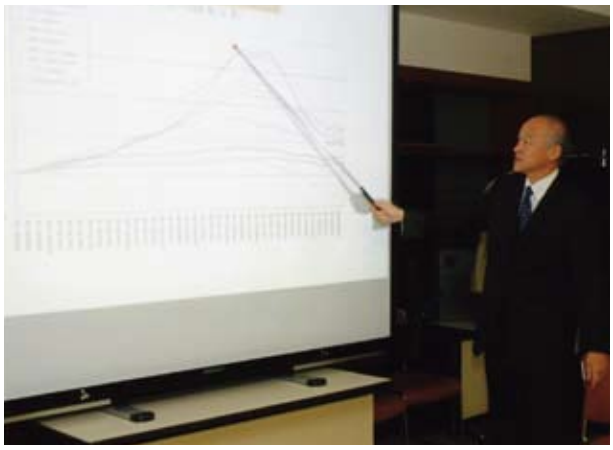
講師：深尾光洋氏　（鉄鋼会館にて）

講演される深尾光洋先生

ドラム缶工業会では、平成21年度の企画として、常任理事会メンバーを対象にミニ時節講演会を開催しました。

リーマンショック及びその後の経済の動きを理解するために、慶応義塾大学教授で日本経済研究センター理事長（当時）の深尾光洋先生を講師としてお呼びしました。

講演テーマは「日本経済の現状と展望」で、米国の金融危機対応の失敗から世界への波及、日本経済の落ち込みが諸外国に比べ格段に大きかった理由、内外の景気刺激策、日本経済の悪化を食い止めるための短期及び長期の政策手段等々に関して豊富なデータを用いて講演されました。長期の政策手段としてはハイレベルの知的移民受け入れ方式が有効とのお話であり、これは優れた外国人が活躍する大相撲方式の経済版と見なせます。



豊富なデータを用いて御説明

常任理事会の後に開催されたミニ時節講演会

熱心に聞き入る常任理事会メンバー

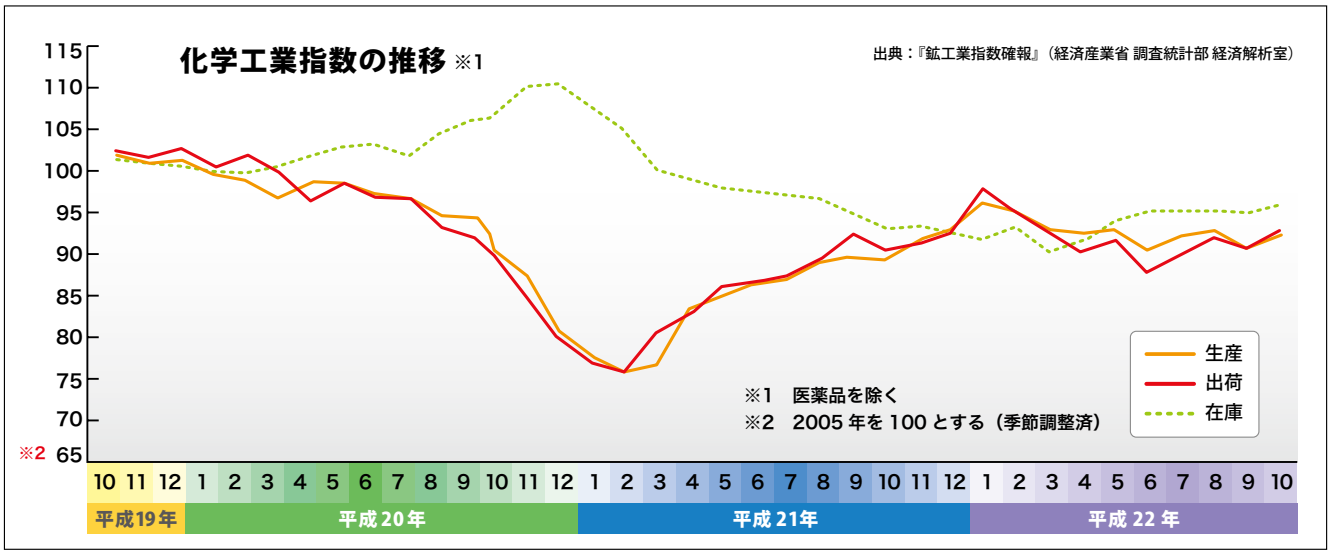
深尾光洋氏　プロフィール

1974年京都大学工学部機械工学科卒業、日本銀行入行
1981年米国ミシガン大学経済学博士
1985年OECD経済統計総局エコノミスト
1987年日本銀行金融研究所調査役
1991年OECD経済局シニアエコノミスト
1996年日本銀行調査統計局参事
1997年慶応義塾大学教授
1999年日本経済研究センター主任研究員
2005年6月より同 理事長

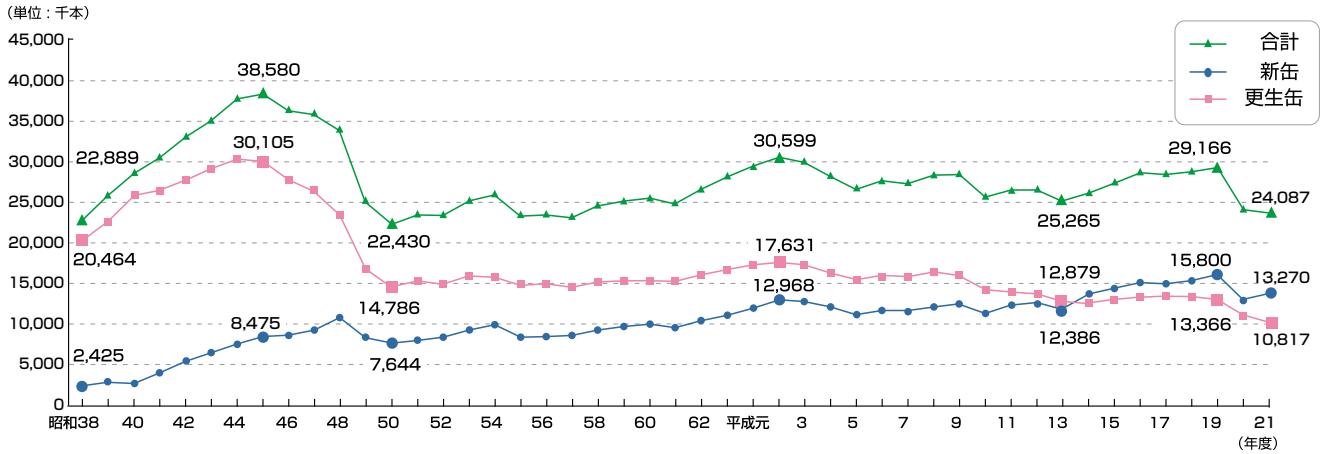
Watcher Report

化学産業の出荷額構成比の推移と概況

10月の化学工業（医薬品を除く）の生産動向を季節調整済指数でみると、生産は前月比1.7%の上昇（前年同月比［原指数による］では2.6%の上昇）、出荷は同2.5%の上昇（同1.2%の上昇）、在庫は同1.1%の上昇（同3.3%の上昇）となりました。



200Lドラム缶市場動向推移（昭和38年度～平成21年度）



（単位：千本）

年度	昭和 38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53
新 缶	2,425	2,924	2,862	4,029	5,343	5,924	7,548	8,475	8,645	9,353	10,607	8,345	7,644	8,113	8,603	9,148
更生缶	20,464	22,763	25,936	26,510	27,852	29,125	30,363	30,105	27,749	26,666	23,520	16,830	14,786	15,444	14,949	16,018
合 計	22,889	25,687	28,798	30,539	33,195	35,049	37,911	38,580	36,394	36,019	34,127	25,175	22,430	23,557	23,552	25,166

年度	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	平成元	2	3	4	5	6
新 缶	10,149	8,613	8,518	8,710	9,436	9,810	10,070	9,674	10,523	11,212	11,993	12,968	12,822	12,156	11,189	11,814
更生缶	15,867	14,880	15,010	14,528	15,230	15,466	15,447	15,241	16,139	16,769	17,424	17,631	17,316	16,300	15,549	15,905
合 計	26,016	23,493	23,528	23,238	24,666	25,276	25,517	24,915	26,662	27,981	29,417	30,599	30,138	28,456	26,738	27,719

年度	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
新 缶	11,636	12,142	12,454	11,380	12,419	12,849	12,386	13,590	14,502	15,186	14,952	15,393	15,800	12,945	13,270
更生缶	15,905	16,367	15,941	14,344	14,084	13,847	12,879	12,602	12,981	13,491	13,658	13,675	13,366	11,346	10,817
合 計	27,541	28,509	28,395	25,724	26,503	26,696	25,265	26,192	27,483	28,677	28,610	29,068	29,166	24,291	24,087

（注）1. 千本以下四捨五入　　2. 昭和 38 年度の生産本数不明につき、生産トン数 67,002 トンを 40 年暦年平均単重 27.63kg で逆算して算出した。

平成21年度出荷実績

平成21年度の200L缶の出荷は、前年度に比べ2.5%増、325千本増の13,270千本と増加しました。

用途別では、石油向け（前年比10.0%減、188千本減）が減少しましたが、化学向け（同4.1%増、410千本増）、塗料向け（同13.4%増、85千本増）と石油以外の用途では増加しました。

ペール缶は前年度比1.5%減の19,672千本、中小型缶は同4.0%減の674千本と減少しました。

平成21年度缶種別・用途別出荷実績

缶種	平成 21 年度実績							
	本数（千本）	前年度比（%）	用途別〔（本数）（千本）〕					トン数
			石油	化学	塗料	食料品	その他	
２００Ｌ缶	13,270	102.5	1,698 (90.0)	10,487 (104.1)	723 (113.4)	187 (84.1)	175 (72.5)	307,780
ペール缶	19,672	98.5	10,218 (91.2)	8,219 (85.1)	652 (84.3)	—	583 (104.2)	32,005
中小型缶	673	86.0	3	643	8	—	19	4,668
亜鉛鉄板缶	382	85.6	—	138	1	3	240	2,556
ステンレス缶	34	98.4	—	28		—	6	787
合計	34,031	99.6	11,919	19,515	1,384	190	1,023	347,796
※前年度比（%）	—	—	92.5	102.7	110.7	100.5	99.8	101.2
※構成比（%）	—	—	16.1	75.4	5.3	1.3	1.9	100.0

（注）1. 用途別200L、ペール缶の上段（　）は前年度比。　2. ※前年度比ならびに、※構成比は、トン数ベース。　3. 亜鉛鉄板、ステンレス缶は、200Lドラム及び中小型缶を含む。

（単位：千本）

缶種	12 年度	13 年度	14 年度	15 年度	16 年度	17 年度	18 年度	19 年度	20 年度
２００Ｌ缶	12,849	12,386	13,590	14,502	15,186	14,952	15,392	15,800	12,945
ペール缶	24,775	22,952	23,049	22,898	22,630	22,642	22,384	22,513	19,973
中小型缶	1,113	981	1,053	1,042	1,119	967	922	927	784
亜鉛鉄板缶	315	307	312	329	413	451	470	461	446
ステンレス缶	38	22	30	42	46	39	40	39	34
合計	39,090	36,648	38,034	38,813	39,394	39,051	39,208	39,740	34,182

平成22年度上期出荷実績

平成22年度上期出荷実績は、下表に示す通りとなりました。200L缶は、前年度上期比12.2%増、749千本増の6,910千本となりました。

ペール缶も、前年度上期比7.7%増の10,177千本、中小型缶も、前年度上期比20.3%増の396千本となりました。

全体では、すべてての用途で前年度上期実績を上回りました。用途別構成比は、化学向けが1.1ポイント増加し、75.3%となり、石油向けが1.1ポイント減少し、15.4%となりました。

平成22年度（4-9月）上期出荷実績

（単位：千本）

缶種 ＼ 用途			石油	化学	塗料	食料品	その他	合計	前年同期比（%）
普通鋼薄板	200 L 缶		851	5,504	372	92	91	6,910	112.2
普通鋼薄板	ペール缶		5,122	4,390	350		315	10,177	107.7
普通鋼薄板	中小型缶	100 L 缶	*	54	3		2	59	110.7
普通鋼薄板	中小型缶	50 L 缶		64			9	73	111.7
普通鋼薄板	中小型缶	アス缶型		2			*	2	32.4
普通鋼薄板	中小型缶	その他容量缶	1	260	*		1	262	128.1
普通鋼薄板	中小型缶	小計	1	380	3		12	396	120.3
その他	200L缶	亜鉛鉄板缶		28	*	3	3	34	96.6
その他	200L缶	ステンレス缶		10			3	13	126.8
その他	200L缶	小計		38	*	3	6	47	103.1
その他	中小型缶	亜鉛鉄板缶		48			78	126	91.4
その他	中小型缶	ステンレス缶		4			*	4	99.5
その他	中小型缶	小計		52			78	130	91.6
合計			5,974	10,364	725	95	502	17,660	—
※前年同期比（%）			105.9	113.1	112.0	105.0	106.3	111.6	—
※構成比（%）			15.4	76.4	5.2	1.2	1.8	100.0	—

（注）※前年同期比ならびに、※構成比は、トン数ベース。　＊は単位未満。

会員

《正会員》
- 斎藤ドラム缶工業（株）
- 山陽ドラム缶工業（株）
- JFE協和容器（株）
- JFEコンテイナー（株）
- （株）ジャパンペール
- 新邦工業（株）
- ダイカン（株）
- （株）東京ドラム罐製作所
- 東邦シートフレーム（株）
- （株）長尾製缶所
- 日鐵ドラム（株）
- （株）前田製作所
- （株）山本工作所

《準会員》
- 森島金属工業（株）

《賛助会員》
- エノモト工業（株）
- （株）大和鐵工所
- 三喜プレス工業（株）
- （株）城内製作所
- 東邦工板（株）
- （株）水上工作所

ドラム缶工業会

〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-2-10
（鉄鋼会館6階）
TEL 03-3669-5141　FAX 03-3669-2969
e-mail：drum.pail@jsda.gr.jp

URL：http://www.jsda.gr.jp

ひびきNo.60（平成22年12月10日発行）
発行人　ドラム缶工業会
専務理事　事務局長　米倉　隆行

本誌は環境に配慮した工程で印刷しています。